

平成 30 年 6 月 28 日現在

機関番号：25406

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16761

研究課題名(和文)南米ボリビア・サンファン日本人移住地における宗教生活語彙体系の調査研究

研究課題名(英文)A geolinguistic research of the religious vocabulary in a Japanese settlement named San Juan in Bolivia

研究代表者

小川 俊輔(OGAWA, Shunsuke)

県立広島大学・人間文化学部・准教授

研究者番号：70509158

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文):研究代表者は、研究期間の2015年4月から2018年3月までの3年間に、3度、ボリビアのサンファン日本人移住地を訪問し、宗教生活語彙(カトリック用語)の記述を行った。宗教生活語彙の記述を行うためには、宗教生活そのものの記録が必要である。その為、宗教生活史の聞き取りを通じて宗教生活語彙を記録する、という方法を選んだ。期間中の3度、それ以前に1度、合計4度の移住地訪問調査によって、当初の研究目的はほぼ達成された。2018年度中に、当該移住地におけるカトリック教会史に関する一般向けの書籍および学術論文を公刊予定である。

研究成果の概要(英文): I visited a Japanese settlement named San Juan in Bolivia three times from 2015 to 2018, and investigated the religious vocabulary of Catholics. The record of the vocabulary was main purpose of this research project.

It seems to be that, in order to describe religious vocabulary, the record of the religious life is necessary. For that reason, I interviewed and recorded religious vocabulary through listening to the history of religion in this Japanese settlement.

This research project could be completed successfully. I plan to publish a book and an academic papers on the history of Catholic Church in this Japanese settlement by March 2019.

研究分野：方言学、地理言語学、言語学、日本語学

キーワード：言語地理学・地理言語学 日本語学 キリシタン キリスト教用語 宗教生活語彙 ボリビア 日系南米移民 危機言語

## 1. 研究開始当初の背景

(1)本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけ

サンフアン日本人移住地に関する研究に、国本伊代(1989)『ボリビアの「日本人村」』がある。この本は、移住地創設の1955年から約30年の出来事について、経済、文化、教育など幅広い分野にわたり総合的に記述している。しかし、宗教生活語彙(宗教・信仰に関する言葉)については、わずかな単語を挙げるだけで、体系的な記述は見られない。また、移住者自身の手による『移住記念誌』が過去4冊編まれているが、やはり、宗教生活語彙に関する記述は見られない。

他方、日本語学研究においても、宗教生活語彙の記述は、一貫して手薄であった。過去、民俗学と方言研究が近い関係にあった頃、『民俗語彙の記録収集』という枠組みで県別の民俗地図などが描かれてきたが(天野武監修(1999-2003)『都道府県別日本の民俗分布地図集成』など)、そこでは日本の伝統的な宗教(主として神道、仏教)の語彙についての記述は見られるものの、キリスト教については全く記録を行ってこなかった。

また、藤原与一は「生活語としての方言の研究」(『国語学』2、1949年)以来、日本各地の生活語彙を記録し、藤原門下には室山敏昭(1987)『生活語彙の基礎的研究』や神部宏泰(2003)『近畿西部方言の生活語学的研究』など、生活語の記述がある。しかし、これらはいずれも生活全般を対象にしているために、宗教語彙の記述が手薄であり、特にキリスト教用語に関する言及は皆無である。一方、体系的ではないが、キリスト教生活語彙については、言語地理学的調査研究に基づく研究代表者により研究が蓄積されてきた(小川俊輔(2014)『キリスト教文化と方言形成』、同(2012)『九州地方における「天国」の受容史』など)。

国外では、長いキリスト教史を持つヨーロッパにおいて、いくつかの言語地図や方言辞典の中に、キリスト教用語について記述するものも見られるが(Alinei, Mario eds. *atlas linguarum europae volume cinquième fascicule COMMENTAIRES*, 1997 など)、宗教生活語彙に特化した研究は、管見の限り見当たらない。特に、カクレキリシタンの子孫が国外に集団移住して設立した海外移住地における宗教生活語彙を記録した研究はない。すなわち、本研究は、海外日系移住地における宗教(キリスト教)生活語彙の記述を目指した世界初の試みである。

(2)研究代表者のこれまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯

研究代表者は、2003年4月から2013年3月まで、九州地方におけるキリスト教語彙(16~17世紀に出版された『キリスト教資料』に用例の見られるラテン語・ポルトガル語)の歴史について、約300地点の言語地理学的調査の結果に基づいて考察を進めてき

た。さらに、2011年4月から、日本全国約1000箇所のカトリック教会に調査票を郵送し、全国におけるキリスト教語彙の受容・土着の実態について、調査研究を行った。以上の調査の過程で、カクレキリシタンの子孫に当たる人々が中心となって創設した南米ボリビアのサンフアン移住地の存在に気がついた。

そこで、2012年2月に当地を訪問し、(ア)キリスト教語彙の残存状況と、(イ)移住地のカトリック教会史、について聞き取り調査を行い、その結果をそれぞれ論文にまとめ、発表した。

これまで研究代表者は一貫して言語地理学的な調査研究を行ってきた。2012年2月の移住地訪問時も、2003年から使用してきた調査票による質問調査を行ったが、それでは到底、この移住地の特異な宗教生活語彙体系を記述することはできず、そのためには移住地に長期滞在し、記述言語学的な観察調査、質問調査が必要であると感じた。それを行うのが、本研究課題である。

## 2. 研究の目的

1. で述べた研究開始当初の背景を踏まえ、本研究の目的を、ボリビア多民族国サンフアン日本人移住地における宗教生活語彙体系の記述、と設定した。この移住地は1955年に創設され、現在の日系人口は700名ほどである。そのうち約半数が長崎県出身者であり、彼らのほとんどが『江戸時代のカクレキリシタンを先祖に持つ人々』である。この点において、世界で唯一の特異な日系移住地と言える。当地ではカトリック教会の前に鳥居が置かれるなど、特異な宗教生活が行われてきた。この移住地の宗教生活語彙を記述した研究は皆無である一方、現在、移住者1世の高齢化が進み、年々亡くなる方が増えている。すなわち、「危機言語」的状況にある。

## 3. 研究の方法

移住者1世の高齢化が進む状況から、当該語彙体系を含む現地語はまさしく「危機言語」である。そこで、研究期間(3年)に、(A)できるだけ多く、移住地を訪ね、調査と記録に努めた。地理的・時間的・金銭的制約から、移住地訪問は各年1回(2週間)であった。そして、(B)国内にいる間に、収集したデータの電子化、文字起こし、分析に努めた。(B)の分析結果を基に、必要に応じて調査票を作成し、(C)移住地を再訪、調査票による調査とフォローアップインタビューを行い、分析の精度を高めていった。(A)~(C)を3年間繰り返した。そして、(D)研究成果を国内外に発表した。

## 4. 研究成果

《1. ボリビア多民族国サンフアン日本人移住地におけるカトリック教会の創成と展開》  
宗教生活語彙の記述のためには、宗教生活

そのものが記述されねばならない。結果として、3年間で最も時間と労力を割いたのは、宗教生活の記述であった。以下、その概要を記す。

3つのカトリック家族を含む16家族が最初の日本人移民としてサンファンにやってきたのは1955年だった。彼らは入植当初の困難な時代にも、カトリック信仰を守り続け、1958年に小さな教会を建てた。そして、この教会を建てた後、彼らは日本カトリック移住協議会に日本語を話す司祭をサンファンに派遣するよう要請した。

彼らの要望を受けて、1960年から1961年の間に、日本語を流暢に話すスペイン人の神父およびカトリック共同体で中心的な役割を担うことのできる信者がサンファンに到着した。この神父と信者達は、1961年に、移住地の中心部にレンガ造りの教会を建てた。

1960年代には、多くの仏教徒がカトリックに改宗し、カトリック共同体は大きく発展した。1968年以降、この共同体のメンバーは、毎年、聖地コトカを訪れている。コトカは、原始林の中から木像の聖母マリアが発見された場所である。また、彼らは1995年に、いくつかの世界的に有名なカトリックの聖地、ファティマやルルド、ヴァチカンやエルサレムを訪問した。彼らの信仰はこの巡礼の経験によってより強固になった。

また、一人の日本人司祭や多数の日本人シスターもこのカトリック共同体に大きく貢献してきた。他方では、今日、この移住地で育った一人の司祭、一人のブラザー、五人のシスター達が世界中で働いている。

以上について、下記〔学会発表〕のとおり、日本移民学会にて発表したところ、学会（司会者）から、次のコメントを頂戴した。

南米ボリビア多民族国にある「サンファン日本人移住地」は、第2次世界大戦後に沖縄出身者を除く日本各地から移住（沖縄出身者は独自に同国にある「オキナワ移住地」へ移住）、中でも約半数が長崎県からの出身者であると共に、彼らの生まれ故郷の特徴ともいえるキリスト教信者が多く含まれ、いわゆる「キリシタン移住者」としての信仰生活が、その後のサンファン移住地の発展にどのような影響を及ぼしたのか、キリスト教研究に詳しい報告者が現地を訪れ調査、彼らの移住に至るまでの経緯や、信仰生活、布教活動（教会建設など）ほか、いわゆる目には見えない心のよりどころとしてのキリスト教という一つの宗教信仰が、いかにその後の移住地運営の安定につながったのかをうかがい知る貴重な報告であった。願うならば、同移住地でのその他の宗教の関わりや、ボリビアでのもう1つ集団移住地「オキナワ移住地」での宗教信仰との比較をされるとその特徴がさら

に顕著となることであろう。ブラジルやペルー以外の他のラテンアメリカ諸国の報告がさらに増えることを期待し、小川氏のさらなる研究発表を期待してやまない。

以上の成果について、現在、学術論文としてまとめる一方（原稿執筆済、2019年3月公刊予定）、固有名詞、写真入りの一般向け書籍として公刊すべく、執筆を進めている。2018年度末の刊行を予定している。

## 《2. 「旧信者」の意味》

繰り返し移住地を訪問する中で、「旧信者」という宗教生活語彙が使用されていることに気がついた。この語について、当該移住地のほか、国内のカトリック教会、ブラジルの日系人社会での使用実態について調査を行ったところ、極めて興味深い事実が明らかになった。これを、下記〔学会発表〕で発表した。その概要は、下記のとおりである。

「旧信者」の意味には、歴史的地理的変異があった。最古の意味は「潜伏（カクレ）キリシタン」である。そこから「潜伏（カクレ）キリシタンの子孫」の意が発生した。この意味の「旧信者」が長崎の信者の移住にともなって国内外に伝播した。国内では、主に長崎県下と大都市（福岡・大阪・名古屋・東京）である。そして、それぞれの地域で「幼児洗礼者」の意が発生し、周辺地域大都市の周辺にも広く伝播した。その後、各地で意味が変化し、次のような意味で使われるようになった。「第二次大戦終結前の受洗者」「第2バチカン公会議以前の受洗者」。他方、南米移住者の間では、「南米移住前、すなわち日本国内での受洗者」の意味で「旧信者」が使われている。要するに、その地域に暮らすカトリック信者の方々の《信仰生活史上最も重大な出来事》が、「旧（信者）」と「新（信者）」の境目となる、と解釈できる。

この研究結果は、厳しい査読制度のある学術雑誌への投稿準備中である。他方、下記のとおり、この研究成果は8th Congress of the International Society for Dialectology and Geolinguistics（国際方言学・地理言語学会第8回国際会議）で報告され、大きな反響を呼んだ。その成果が認められ、同国際会議の学会レビュー論文執筆者に指名され、執筆したのが、下記〔雑誌論文〕である。

## 《3. 国際方言学・地理言語学会第8回国際会議の学会レビュー》

同国際会議を主催した国際方言学・地理言語学会は、地理言語学（Geolinguistics）を専門とする唯一・最大の国際学会である。この学会の会長を務めるMaria-Pilar Perea氏が編集委員長の任にある国際学術雑誌*Dialectologia*, vol.13に、依頼を受けて、当該国際会議のレビュー論文を執筆した。以下

にその概要を記す。

82 researchers from 17 different countries attended this congress, and 76 lectures were given. The official languages of the conference were English and Turkish. During the congress, two sessions were carried out simultaneously. One was an English session, and the another was a Turkish session. But in the afternoon of the second day, three sessions were done concurrently.

Lectures were classified into four topics as follows:

- Geolinguistics
- Sociolinguistics
- Descriptive linguistics, Documentation, Dictionary and Corpus
- Dialect education

Geolinguistics was a topic discussed mostly in this international congress. There was same tendency in 5th & 6th & 7th congress of the International Society for Dialectology and Geolinguistics (SIDG). On the other hand, it seems to be that the interest for Sociolinguistics is increasing. The keywords of Sociolinguistics in this congress were younger generation, identity, language contact, grammar and so on.

Many researchers from Baltic countries and Japan participated in this congress. Thanks to them, we familiarized ourselves with Lithuanian, Latvian and Japanese. However, I hope that more and more researchers from various regions and countries will take part in the next congress.

#### 《4. 「天国」の受容史》

研究代表者は、かつて、日本語学会の機関誌『日本語の研究』8(2) (pp.1-14, 2012年4月刊)に「九州地方における「天国」の受容史 宗教差、地域差、場面差」との題目で論文を発表した。これを英訳し、当該論文では対象としなかった若年層における「天国」受容の実態を書き加えたのが、下記〔雑誌論文〕である。以下に、その概要を記す。

*Differences in religion, region, speech partners and situation have an influence for the acceptance and use of the term, "Tengoku" by elderly people. One of the reasons is "Tengoku" was originally a Christian term.*

*Young people tend to accept and use "Tengoku" more than elderly. And "Tengoku" is used by younger people without it having a Christian meaning.*

*The mechanism that young people accept "Tengoku" is very similar to how*

*they accept the wedding ceremony in the Christian-style, necklaces in the form of a cross, and Christmas.*

#### 《5. 宗教生活語彙体系の記述：今後の展望》

過去4回×約2週間の現地調査を通じて、当初の研究目的であった《ポリビア多民族国サンファン日本人移住地における宗教生活語彙体系の記述》は、概ね、完了することができた。ただ、あくまで「記述」であって、「学術論文」のかたちで成果を問える段階にはない。幸いに、2018年度から2021年度までの予定で、新たな科学研究費補助金による研究課題「南米および日本の長崎系カトリック・コミュニティにおける宗教生活語彙の調査・研究」が採択された。この研究では、ブラジル、アルゼンチン、パラグアイの日系移住地および集住地、名古屋、大阪、福岡における長崎出身信徒によるカトリック・コミュニティを訪問し、サンファン日本人移住地で行ったのと同様の方法で、宗教生活語彙を調査・記述する予定である。全ての調査が終わった段階で、各地における宗教生活語彙の継承、忘却、変容等の一般性と個別性が明らかにされるはずである。その段階に到って、学術論文または報告書等の形式で、研究成果を公開するつもりである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

Ogawa, Shunsuke, Sociolinguistic and Geolinguistic Study on the acceptance of the term *tengoku* ("paradise" or "heaven") in the Kyushu region of Japan, Eveline Wandl-Vogt and Amelie Dorn eds. *dialect 2.0*, 査読有、2017、pp.260-273.

小川 俊輔、藤井 緑、広島市「平和宣言」の文章と文体 文字数と語に焦点をあてて、県立広島大学人間文化学部紀要、査読無、第12号、2017、pp.81-101.

<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/pu-hiroshima/detail/1250720170829161740>

Ogawa, Shunsuke, Shibliyev, Javanshir, Review on the 8th Congress of the International Society for Dialectology and Geolinguistics, *Dialectologia*, 査読有、vol.17、2016、pp. 201-226.

<http://www.publicacions.ub.edu/revistes/dialectologia17/reviews.asp>

〔学会発表〕(計3件)

小川 俊輔、サンファン日本人移住地における「キリシタン移住者」の信仰生活発展史、日本移民学会 第27回年次大会、2017年6月25日、東洋大学

小川 俊輔、日本のカトリック教会における「旧信者」 長崎出身ポリビア移住者への聞き取り調査および全国カトリック教会アンケート調査の結果から、九州方言研究会 第41回研究会、2016年1月9日、長崎大学

Ogawa, Shunsuke, Who Is the "Old" Believer in Japan? —Historical Sociolinguistic and Geolinguistic Analysis—, 8th Congress of the International Society for Dialectology and Geolinguistics, 2015年9月17日、CRATOS PREMIUM HOTEL (North Cyprus)

〔図書〕(計3件)

小川 俊輔、私家版、『さらさらいくよ』第4号、2017、108

小川 俊輔、私家版、『さらさらいくよ』第3号、2016、118

小川 俊輔、私家版、『さらさらいくよ』第2号、2016、95

〔その他〕

<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/~s-ogawa/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小川 俊輔 (OGAWA, Shunsuke)  
県立広島大学・人間文化学部・准教授  
研究者番号：70509158